高齢級人工林の適切な管理技術に関する研究(R2～R5)

森林総合研究所

背景・目的

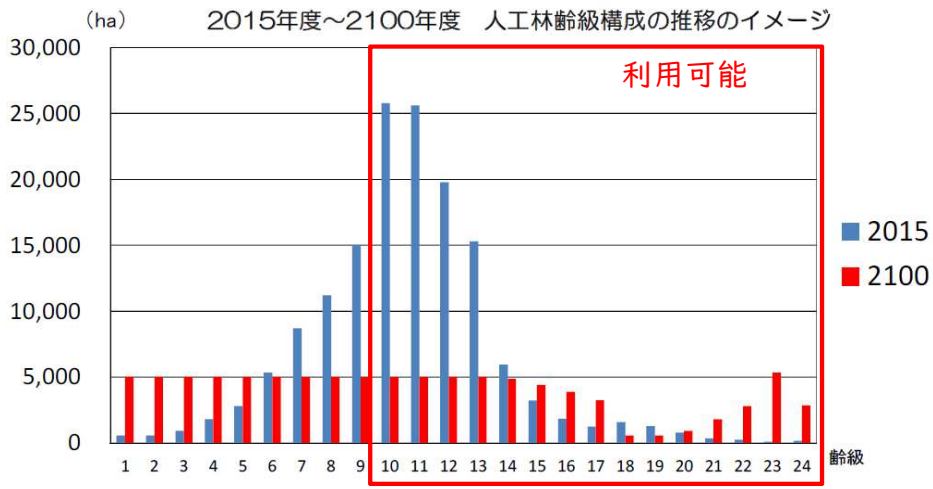
○県内人工林の約6割が利用可能な時期を迎え、森林資源は充実

○森林資源の持続的な活用のため、齢級構成の平準化が必要であり、これに伴い、付加価値の高い大径材生産が可能な長伐期林への移行が可能な森林がある。

○しかし、長伐期林に向けて、必要な成長量や施業等に関する情報は少ない

○このため、標準的な伐期を越えた森林の成長量や特性を把握し、適切な長伐期林へ誘導するための施業指針を作成

○人工林齢級構成の平準化



「やまなし森林・林業振興ビジョン」より　※齢級の単位は5年（1～5年生が1齢級）

研究内容

○高齢林の現況調査を行い、林分の成長予測モデルを作成

○50～60年生林の現況調査を行い、成長予測を踏まえ施業指針を作成

○風倒害等のリスク評価を行い、施業指針に反映

調査内容	1年目	2年目	3年目	4年目
高齢林（70年生以上）調査（毎木調査・樹幹解析）	←	—	—	→
50～60年生林調査（毎木調査）	←	—	—	→
風倒害等リスク評価（文献調査）			←	→

期待される効果

○付加価値の高い大径材の生産が可能となる

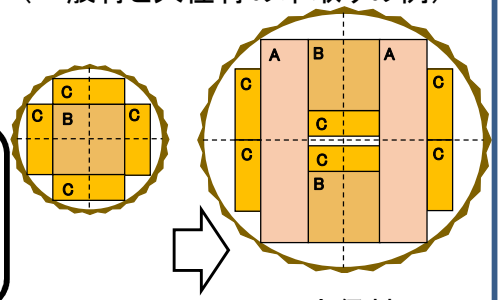
○人工林齢級構成の平準化が促進される

林業の成長産業化

・収益性の向上

・県産材の安定供給が促進

（一般材と大径材の木取りの例）



一般材
B:正角材 1本
C:ラミナ 4枚

大径材
A:平角材 2本
B:正角材 2本
C:ラミナ 6枚